

スコットの小説

—The Bride of Lammermoor を中心に—

海老池俊治

多少でも文學に關心を持つてゐる人なら、誰でも小説家スコットの名を知つてゐるに相違ない。スコットはわが國で最も廣く名を知られたヨーロッパ作家の一人であろう。しかも、奇妙なことに、實際多くその作品を讀んだ人——まして、それを愛讀し、深い感銘を受けた人の數は、思ひの外少いようである。

「アイヴァンホウ」(Ivanhoe) の翻譯はたしかに代表的な廉價版のヨーロッパ文學作品の叢書に入つてゐる。しかし、その他の作品が果してどれだけ翻譯され、普及してゐるであらうか。或いはまた、折角そのような手に入れ易い形にされた「アイヴァンホウ」が、果してどれだけ深く内面の反省を促し、魂の慰藉を與えてゐるであらうか。大抵の人が、「アイヴァンホウ」一篇からスコットの全貌を獨合點に推察してゐるばかりでなく、この作品からさえも、とつて、例えば、「罪と罰」や「女の一生」のような切實な感銘を受けておらず、また、「クオ・ヴァーデイス」や「レ・ミゼラブル」のような清新な興味を覺えていない、といつては、性急ないゝ過ぎかも知れない。しかし、たとえいゝ

過ぎであつても、見當違ひの妄斷とはいえないようである。

今日スコットの翻譯が少いことには、勿論、種々の理由があるであろう。なかには、まったく技術的な問題もないとはいえない。しかし、ある作家乃至は作品が他國に移植されない——移植しようと努力されない譯は、根本的に、移植に價しないと思われているからに相違ない。原文を読む人が、翻譯しても愛讀されるまいと豫想するばかりでなく、翻譯の勞をとるほどの愛着を感じないからに相違ないのである。右に一言したように、スコットの小説は今日決して廣く愛讀されているとも、深い感銘を與えているともいえない。そして、英語の原文を読めるほどの人も、「アイヴァンホウ」その他一二の作品以外に、格別彼の小説を読みあさる様子もなく、また、讀んだ作品に大きな愛着を抱いている様子もない。とすれば、殆ど誰でも名だけは知つてはいるはずのこの作家が、わが國の讀書人の内面とそれほど没交渉な原因は、一體どこにあるのであろうか。それほど廣く喧傳されるようになった譯は、當然、相當の理由があつたからに相違ないにも拘らず、實際それほど無頓着に看却されている原因を、探る必要はないであらうか。

喧傳されるべき理由は、たしかにあつたのである。多くのイギリス小説家と同じく、スコットが文化的先進國の代表作家と認められたのは、わが國に歐米の文物が移入された當初からであつた。彼を紹介し、翻譯しようとする努力が試みられなかつた譯ではなかつた。しかし、矢張り、他の多くのイギリス小説家の場合と同じく、その努力は大きな効果を生まなかつた。そして、浩瀚なスコットの全集はいつとはなく古色蒼然と書棚の隅に埃を被つているか、或いは、百科辭典と學校の教科書のなかにだけ名を列ねることになつてしまつたようである。

スコットが移入された當初に、その理解と移植の方法に、何か重大な缺陷があつたのではないであらうか。今日わ

が國の讀書界に右のような奇妙な立場を占めるこの作家を、正しく理解し直すために、彼が初めてわが國に紹介されたときの事情を驗べることが、何かの役に立たないものであろうか。どれだけのことが明かになるかは分らないとしても、少くともそれは實證的といえないであらうか。

いずれにしても、スコットの再評價はわれわれ自身の精神生活の反省に資するであらう。そして、實證的態度は反省の確實な裏づけとなるであらう。

二

周知のように、わが國でヨーロッパ風の文學論を提唱した最初の纏まつた論文は、坪内逍遙の「小説神髓」である。近代社會の成立期であつた明治十年代の、新しい社會の擔手としての知識人が、「小説」に、更に文學一般に對して抱いた觀念が、この一篇に最も明かに表われているのであるが、筆者逍遙はスコットの作品を彼のいわゆる「小説」の一典型と見做していたようである。全篇を通じて、九ヶ所スコットに對する言及が見出される。

「小説神髓」の論旨は、一言でいえば、藝術としての小説の自律性と寫實主義の提唱である。筆者によれば、小説は藝術（筆者は「美術」という言葉を使つているが）の一種であり、その本義は「人の心目を悦ばしめ且其氣格を高尙にする」² ことにある。といつても、「人の氣格が高尙」になることは、小説を讀んだ自然の結果であつて、「目的」ではない。藝術は實用的な技術と本來質を異にするものだからである。小説の主眼は「人情」と「世態風俗」の描寫にあり、「人心を娛しましめ」さえすれば、その目的は足りる。勸善懲惡の効果などはたゞ間接の利益に過ぎない。云云。以

上の論旨には、一應、近代ヨーロッパ風の藝術觀が盛られている。しかし、その概念規定はしばしば曖昧であり、論理は混亂しているようである。近代日本の生み育むべき文學の指針となつたこの論文が、劃期的な勞作であることは疑いがないが、その論旨は、よくいわれるように、徹底していいないのである。

「人の氣格を高尙にする」ことは小説（藝術）の「目的」でない、と斷りながら、それが「本義」であるといふ、勸善懲惡の効果を間接的と稱しながら、なお詳細にその利益を説くところには、文學史家の指摘を俟つまでもなく、審美と道德の混淆が見出される。そして、そのような矛盾は、根本的に、新舊兩時代の交替期に生活していた人間——たとえそれがいかに先覺者であつても、或いは、却つて先覺者であるがゆえに——の、運命的な混亂に根ざしているのである。舊來の江戸文學を改革して、近代ヨーロッパ風の文學の創作を唱道した筆者が、小説の實體として頭に描いていたもの、すなわち、實生活の基礎に立つて、生きた感覺を以て捉えていた文學作品そのものが、江戸時代傳來の稗史小説に外ならなかつたからである。例えば、勸善懲惡を論難した筆者は、もとより、馬琴を新文學の標識と見做していたはずがない。しかし、それにも拘らず、論證の參考にこの讀本作者を援用した個所の夥しいことは、むしろ驚くべきほどである。殊に、歴史小説にふさわしい文體としていわゆる雅俗折衷文體を推賞し、自ら「雅俗折衷の稗史體の文例を擧ぐるとて馬琴翁の文のみ掲げ」たと斷つているほど、馬琴からの引用を多く例文に並べ立て、いることから察せられるように、筆者が歴史小説として思い浮べる作品は、具體的に先ず「八犬傳」であり、「美少年録」であつたらうと思われる。

逍遙は歴史小説家スコットを「人の心目を悦ばしめ且其氣格を高尙にする」作品の代表的作家と考えていたようである。

ある。彼によれば、スコットの作品は、そこに描かれた人情風俗が讀者を「娛ませる」ところに、眞價を持つてゐる。それが眞の（すなわち新しい）文學の存在理由である。實用的な技術とは違つて、文學には、道德的にもせよその他何にもせよ、娛樂（鑑賞）以外に「目的」のあるはずがない。しかしまた、「人の氣格を高尙にする」——いわば道德的な特徴を備えているから、スコットの小説は高級な文學である、と逍遙は認めていたに相違ない。スコットの小説が勸善懲惡の目的を持つてゐるとは、勿論考えていなかったであろう。しかし、無意識のうちにその上へ馬琴の物語を敷き並べて、それを透して眺めていたに相違ないのである。

勿論、逍遙はスコットと馬琴・京傳との區別を立てゝいる。スコットを歴史小説の代表作家であると斷じ、馬琴・京傳などは名は歴史小説の作者であるが、實は「世話物」の作者に近い、といつてゐる。しかし、この「時代物」「世話物」の區別は、彼のいう「美術」（藝術）としての小説の本質に關するものではない。「時代物語の目的は、風俗史の遺漏を補ふと、正史の缺漏を補ふとの二點」にある、と記したとき、筆者はその「目的」という言葉を曖昧な意味に使つたのである。そのような智的要求が嚴密に藝術の「目的」であるとすると、筆者の藝術觀に抵觸するはずである。しかし、興味のある點は、審美と道德の矛盾を見逃した筆者が、また、審美と智識の交錯・融合について、明瞭な考察をも、精細な分析をも行つていないことである。正確な歴史的知識の獲得が文學を意義あらしめる所以である——いゝかえれば、文學活動は當然智的要素を含むばかりでなく、智的追究は文學的（美的）體驗の不可缺な要素である、と逍遙は主張しているように見える。そして、智識の獲得と美的情操の陶冶が人格完成にどのように作用し合ひ、どのような意義を持つかを、反省してゐないように見える。

一 橋論叢一第二十五卷 第一號

要するに、「小説神髓」の論旨に關する限り、逍遙は馬琴風の稗史を排撃して、スコット風の近代ヨーロッパ小説を推賞しながら、小説の本質上、兩者がどう違つてゐるのか、明かにしていない。少くとも、スコットの作品を具體的に例示して、その差を明かにしていないのである。

1 明治十八—十九年出版。下巻の附記に、十七年中の起稿にかゝる旨が記されているが、草稿はその前年に成つたという。――

東京堂版「小説神髓」解題

2 「小説神髓」上巻 小説總論

3 同書下巻 文體論

4 同書下巻 時代物語の脚色

三

逍遙がスコットをどう理解していたか、或いは、どう理解すべきだと信じていたかは、その具體的な作品の扱いかを見れば、知ることが出来るであらう。そして、その扱いかたは、最もよく翻譯に――もし翻譯があるとすれば――表われるはずであらう。翻譯は原文の紹介であるとともに、また、理解の表示でもあるからである。

ところで、「小説神髓」の出版の數年前、正確に言えば、明治十三年に、實際、逍遙はスコットの小説を一篇翻譯出版してゐるのである。橋顯三譯述と表記した「春風情話」がそれであるが、「第一篇」の刊行だけで未完に終つたこの譯書の原本が、「ラマムアの花嫁」(*The Bride of Lammermoor*, 1819)であることは、譯書の附言に記されている通

りである。表記の譯者名は、逍遙が實在の知人の名を借りたものであることも、今日よく知られている。

「小説神髓」中に、逍遙が歴史小説の文體として雅俗折衷文體を推賞し、その例證に馬琴の文章を引いていることは、右に述べたが、そのことからこの譯書の文體は容易に推察されるであらう。たしかに、それはまったく馬琴風であるといつてよいのである。冒頭の一節を示せば、次のようである——

紅淚霑襟古堡夕

第壹套

白双閃空葬場曉

聞道、往昔「蘇格蘭」州の東、「魯志安」の山陰なる、要衝の地に、「烏林」と云ふ一箇の堅城あり、これが城主の名は、同じく「烏林」と呼びて、遠き上つ世よりその系統綿々として絶えず、家門富み榮えて、平彪武、素因道、道暗など呼ばるゝ當國の名高き豪族と、累世秦晋の縁を結び、權勢肩を並ぶるものなく、世に知られたる門閥なり、但し這些の豪族の興廢存亡につきては、云ふべき事も少からねど、そは大方「蘇國」の青史に載せて委細なるゆゑ、今はくだしさを厭ひて省きつ、

譯者が馬琴に似た文體を採つた譯は、その内容を類似の形式を以て表現できると考えたからに相違なく、従つて、彼がスコットと馬琴を少くとも類似のものと思つていた證據の一つと考へてよいであらう。事實、柳田泉氏によれば、逍遙自身が「自分は馬琴好きから、馬琴とスコットが一脈通ずるものがあるので、スコットが好きになつた。そして筆ならしとして此の作を譯してみる氣になつた」と語つたという。

また、逍遙のいわゆる「時代物」（歴史小説）としてこの譯書を見ても、おのずから興味深い問題が提起される。馬琴の小説に表われた人物と事件、例えば、八犬士とその行動が、「風俗史と正史の遺漏を補ふ」ためにどれだけ役立つかは、逍遙を俟つまでもなく明かである。「八犬傳」は智的な史書ではない。しかし、「ラマムアの花嫁」に描かれた事實が、當時、智的追究の對象としてどれだけ意義を持つていたであろうか。スコットランドの一豪族の衰亡史が、どれだけ重要な意義を持つていたであろうか。先進國の歴史はたしかに當時の先覺者にとつて、清新な、切實な研究課題であつたに相違ない。しかし、「魯志安の烏林」というように日本化しなければならぬ——そうしなければ、具體的な人間としての心象が稀薄になるような人物の細かい行狀を、智識として身につけることが、切實な課題であつたといえるであろうか。魯志安という名を例えば魯安志と變えても、烏林の代りにたゞの林といつても、知識の獲得に關する限り、大した差はなかつたはずである。

譯者は附言に、

この物語は蘇格蘭といふ王國にてありしことなりそも蘇格蘭といふは大英島の北部にありてむかしは獨立したる王國なりしが一千六百年の頃よりはじめて英吉利國と合併してそが政をうくることゝはなれりこは今の世の幼童はたれもくゝいとよくこゝろえたることなれどなほとをにひとついぶかしくおもはん人のためにとてかくは驚しおくにこそ

と記しているが、その筆致は、先進國に對する憧憬を表わすとともに、物語中の事件が歴史の正統的位置から外れている——いゝかえれば、史實の詮索は問題でない、と斷つてゐるかのように見える。

「ラママアの花嫁」中の事件が、實際どの程度に正しい歴史的事實であるかは、しばらく問題外にして、スコットにとつて、それは、例えば、八犬士の行動と大差がなかつたように思われる。「春風情話」は決して史的事實の整理、或いは、系統化の記録とは考えられていないのである。

少くとも明治十年代の逍遙は、スコットを馬琴と同一視しないまでも、ヨーロッパ文學の代表としてのスコットを、馬琴を己がものとして身につけた小説觀で眺めていたように思われる。スコットの移入は、先ず、江戸文學の上に重ね合わせたヨーロッパ文學という形で行われた、といつてよいであろう。

1 逍遙選集 別冊第二(春陽堂)「春風情話」

2 柳田泉「明治初期の翻譯文學」明治初期の翻譯英國小説

四

明治十年代に初めてスコットを紹介し、翻譯した逍遙は、たしかに時代の先覺者であつた。しかし、右に述べたようなその先覺的意識が、急激な社會生活の展開とともに、忽ち時代に取残されたことは、當然であつたといつてよいであろう。當時の知識人の代表者逍遙によつて紹介されたスコットは、先進國の大文豪であるという名聲を博した。そして、すぐ時代後れになつた。或いは、教科書的作家になつた。スコットがわが國で實際には讀まれない名だけの小説家になるべき運命は、その紹介の當初に決定された、といつてもいゝ過ぎではないのである。

しかし、それにしても、逍遙がスコットを馬琴に似ていると感じたのは、まづたく彼の誤つた獨斷だとはいえない

であろう。そして、それ以來、スコットを紹介し直そうとする試みが、讀書界の切實な要求に應じることができず、やがて、ヨーロッパ大陸の作家の力強い移入の流れのうちに没し去つてしまつた咎を、紹介者にのみ歸することはできないであろう。一切の先入主を棄て、スコットに對しても、そのなかに本質的に馬琴に通じるもの、すなわち、歴史を背景にした單に外面的・偶發的な事件の生起、内面の必然性が感じられぬ平板な人物、安易な道德觀（或いは、道德的であると自稱する態度）等が見出されるのではないかと、當然、推察されるであろう。で、そのような事情を次に驗べてみようと思う。とにかく、「春風情話」と比較するために、「ラマムアの花嫁」とはどのような作品か考え直してみることしようと思う。

先ず、この作品の筋は次のようである――

スコットランド、東ロウジアンの領主レイヴンズウッドは、一六八九年の亂に去就を誤つて、貴族の稱號を剝奪されたのであるが、次第に領地を失い、落魄している。この昔氣質な一徹者と争つて、その領地を奪つたものは、尙鹽官サー・ウィリアム・アシュトンという世才にたけた成上りの権力者である。レイヴンズウッドは敵を咥いながら死ぬ。息エドガーは父譲りの激しい氣性であるが、父の怨みを受け継ぎ、アシュトン一家に對して宿命的な敵意を抱いている。ところが、ある日、偶然野牛の群に圍まれて危険に陥つたサー・ウィリアムとその娘ルーシーの生命を救う。若い二人は戀仲になる。エドガーを政争に利用する目的で、サー・ウィリアムは彼の機嫌を取る。エドガーは宿怨を忘れて、祕かにルーシーと婚約する。サー・ウィリアムの夫人は權勢欲の強い女で、娘が落魄した無力な男と結婚することを好まず、ルーシーに強要してエドガーとの約束を破らせ、別の男と結婚させる。結婚の當夜、ルーシーは發

狂して、新郎を刺し、重傷を負わせる。そして、間もなく死ぬ。エドガーはルーシーの兄と夫との決闘の場所へ急ぐ途中、流砂に呑み込まれる。

イギリス(スコットランドを含めて)史上、第十七・八世紀は近代社會の成立期であつた。古い封建的領主が經濟的勢力を失ひ、政治、宗教その他社會生活の凡ゆる面に大きな交替が生じた。レイヴンズウッドはそのような社會生活の變革期の犠牲者である。一徹短慮で、傳統に盲目的な執着を抱くこの貴族主義者は、殊に後進的なスコットランドの舊勢力を代表している。失意のうちに彼が死に、その生活態度を受け継いだ息エドガーが悲劇の主人公となることは、歴史の必然性を示す挿話だといつてもよいであらう。レイヴンズウッドの死に筆を起し、エドガーとルーシーの純情な戀、周圍の干渉、反對、二人の悲惨な死を物語つた——物語の展開は、些かの滯滞もなく緊張した筆致で描かれている。そして、その展開が歴史の背景に見事な眞實感を以て調和している。その意味で、この物語の事件は、たとえ史上の大事件とはいへなくても、決して外面的・偶然的ではないのである。

作者は史上の事件を、たとえ幾分常識的にはあつても、適確に把握し、描寫しているといつてよいのであるが、重要な筋は殆どそのまま事實であつたらしい。一八三〇年版の序によれば、ルーシーのモデルになつたジャネット・ダルリンプルという少女の哀れな結婚は、一六六九年八月二日であつたといふ。スコットはそのような事實を正しく歴史の流れのうちに捉えて、力強く描寫したのである。

右のような物語に登場する人物、例えば、エドガー、ルーシー、サー・ウィリアム、同夫人等は、單純な物語中の人物らしく、性格が平板である。サー・ウィリアムはいかにも世才にたけた、狡猾で臆病な俗人であり、その夫人は、

小マクベス夫人といつてもよいような、野望家らしい野望家である。エドガーは青年らしい素朴な情熱家であり、ルーシーはやさしく氣の弱い世間知らずな少女の典型である。彼等はみな性格の一面をしか持つていない——少くとも、表わしていないように見える。しかし、たとえその性格は平板であつても、内面が空疎だとはいえない。各々の内面生活が獨立に存在を主張しつゝ、周圍の生活にとけ込んでいるからである。各人の性格の純粹さが、物語の世界を成立させる要素だからである。

では、この物語は道德的であろうか。そして、もしそうであるとすれば、その道德觀は安易であろうか。とにかく、作者が物語中に露骨な道德的教訓を主張していかないことは明かである。戀と命を失うエドガーは、粗暴な性格であつても、積極的な悪人ではない。狂死するルーシーは、性格が弱い缺點があるとしても、清純で可憐である。同情に價する人物であり、その哀れな死にふさわしい悪事を働いたなどは、とうていいえない。馬琴風の勸善懲惡の原理はこの場合當て嵌まらないのである。しかしまた、サー・ウィリアムと同夫人に象徴されている世俗の障害に抗し、それが惹き起した混亂を生き抜く意欲と聰明さを缺いていた二人は、ある意味で生活態度に缺陷を持ち、従つて、不慮の災を招く責任を負わなければならない。時代の流れに即應できなかつたこの戀人達は、その不幸を幾分自ら招いたといつてよい。時代、或いは、環境と個性の矛盾・調和について、この物語は反省を興える。その意味で、道德的だともいえるであろう。しかし、それは勿論道德的であると自稱する態度ではない。また、平明ではあつても、安易ではないといつてよいであろう。

五

「ラマムアの花嫁」の書き出しは次のようである――

東ロウジアン1の肥沃な平原から登り路になる峠道の山峽に、以前、大きな城があつたが、今ではその廢址が目に見るばかりである。昔の城主は、強力な、勇猛な豪族の一門で、城と同じ名を名乗り、レイヴンズウッドといつた。その血統は遙かな古代に遡り、ダグラス、ヒューム、スウィントン、ヘイその他同國の豪家顯門と婚姻を結び合つていた。一門の歴史はスコットランドの歴史のうちに捲き込まれたことが多く、その功業は正史に記録されている。

いかにも平明な文章である。ところが、數頁進むと、事實の記録にふさわしいこの平明な筆致に、忽ち、陰鬱で、殺氣を帯びた緊張が加わる。亡くなつた父レイヴンズウッドの葬式を、親類一同が行うことになるのであるが、古風な彼等は、法を犯して、監督教會の儀禮を守ろうとする。ところへ、尙璽官アシェトンの令狀を持つた役人が踏み來んで來る。一同が激怒する。エドガーは

刀を引擱んだ。そして、役人にそれ以上邪魔をすると命がないものと思えといふ、牧師に式を續けるように命じた。²單純で力強い物語の進行が、右の引用からだけでも察せられるであろう。背景の明確な敘述と、人物の直截な性格描寫の契合が窺われるであろう。

先にいつたように、人物の性格が、平板ではあつても、物語の世界を成立させ、個性の反省を促すことは、この物語の大きな特徴である。そして、それは主人公エドガーやその相手ルーシーについていえるばかりではない。副人物

もまた夫々その人物なりに、いきいきと躍動している。一體に、スコットは平面的な、いわば戲畫的な小人物の描寫に優れており、そのような人物のなかには、人間の一つの型として廣く持て囃された性格が多いのであるが、「ラマムアの花嫁」のなかに、その代表的な例がある。零落したレイヴンズウッド家の執事で、主家の體面を保つに汲々としている、滑稽なケイレブ・ポールダストンは、スコットの創造した人物中でも最も有名な一人である。

例えば、ルーシー父子を荒れ果てた我家へ伴つて來たエドガーの様子を見て、周章てたケイレブの姿は、いかにもこの人物らしい面目を發揮している。客を案内するために門口からケイレブを呼ぶエドガーの聲には、「客を招く人の禮儀にふさわしからぬ、嚴しい、いや、荒々しいといつてもいい調子」が響いた、と作者は書いているが、そのときケイレブは客に饗應すべき酒食の用意がまつたく整つていないことを思つて、茫然としてしまふのである——

「若殿はおつむりがおかしくおなりだべか」と彼はひとりぶつぶつ呟いた——「じえんじえんおかしくおなりだべか、ふんとに、御大身の殿方御婦人を、それに、その尻から、こうぞろぞろ人をつれて來なさるようじや。十二時が打つたつうに。」

右の言葉には、その滑稽さのうちに悲劇の危機が感じ取れる。ケイレブは嚴しい運命に躍らされる道化のように感動的である。そして、人間の無力さのなまなましい例示のように見える。物語のいわば内的展開に平板な人物の性格が絡み合されている、最もスコットらしい技法——そしてまた、その人間觀を示すものである。

「ラマムアの花嫁」は時代乃至は環境と個性との相剋を、簡明に形象化した傑作である。そこに窺われる人生觀は多少常識的といえなくもないであろう。しかし、その形象化は間然するところがないのである。

- 1 *The Bride of Lammermoor*, chap. I. (原文を掲げなければ正確な論證にはならないのであるが、都合で省略する。)
- 2 *Ibid.*, chap. I.
- 3 *Ibid.*, chap. VIII.

六

スコットの女婚ロックハートによれば、「ラマムアの花嫁」の創作中、スコットは激しい胃脘痛に悩み、ペンをとることができず、口述して筆記させたという¹⁾。スコットは普段から速筆であり、推敲に意を用いなかつたといわれるが、この作品が特に緊迫した荒々しい力に満ちているのは、そのような事情のためかも知れない。殊に、その粗暴なほど悲劇的な結末は作者の病的な心理の表われであろう、と説く批評家がある²⁾。

その理由はとにかく、「ラマムアの花嫁」はスコットの作品中で最も荒々しい迫力に満ちたものゝ一つである。それほど悲劇的な結末を持つた作品は他にないようである。しかし、それにしても、右に述べたように、物語のなかの人物は徒らに感傷的な誇張を加えられていない。彼等の姿が、たとえ平板な戯畫のように見えようとも、その行動と行動の反撥・牽引によつて生じる事件は、事實としての歴史とその大きな流れから逸脱することがない。まして、他の一そう均勢のとれた、穏やかな、或いは、喜劇的な作品は、明かに樂天的な歴史の肯定の上に立つている。「アイヴアンホウ」のような民謡の英雄を取扱つた、遙かな夢幻の國、中世イングランドの物語には、それほど特徴が露わでないが、處女作以來、作者が自分の生國スコットランドを背景に描いた多くの小説は、已れの過去を振返つて、これ

を反省しながら、ありのままの事實を受け入れようとする健全な精神に裏づけられている。その意味で、實證的であり、道德的である。

スコットの小説は勿論史書でもなく、道德の書でもない。スコット自身小説をそのような智的、或いは、道德的追究の書とは考えていなかつたようである。彼が詩人（詩は少くとも高級な教養と考えられていた）たる特權を擲つて、小説の筆をとつたとき、彼の眼前に、完成された娛樂讀書としての小説という文學上のジャンルが存在した。市民社會の日常生活を描いた娛樂の書小説は、スコットの作品よりも半世紀以前、すなわち、第十八世紀の中葉に既に完成されていた。スコットは第十八世紀の代表的小説家を論評して、「ある作品の表向の教訓は、普通讀者の最も興味を感じないものである。それは、豪華な行列のあとからびつこを引き引きついで行き、行列を眺めている人の注意を引こうと無駄な努力をする乞食のようなものである」と書くことができた。そして、その論題の作家が不道德だという非難を、見當違いだと斷じることができたのである。

しかしまた、元來健全な紳士であつたスコットは、放埒な小説の流す害惡を氣にせずにはおれなかつた。劣情を煽るような物語は辯護の限りでない、と同じ論文のなかに彼は書いている。美的鑑賞の絶對的價値を認めながら、それが他の精神的價値と抵觸してはいけなさと配慮しているのである。もしそうなれば、健全な精神の陶冶が阻まれるからである。また、小説を読む習慣から生じると懸念される最惡の害は、「眞の歴史と有用な文學」の讀書を厭わせることだ、とそのすぐあとにスコットは書いているが、彼にとつて、歴史は「有用な文學」と同列に並ぶものであり、精神的訓練に缺くべからざるものである。その點で、道德と同様な價値を持つている。小説を耽讀して、いゝかえれば、

情緒の偏好に陥つて、健全な精神の規律を弛めてはいけない、というのである。

歴史は第十八世紀のイギリスに特に著しく勃興した學問である。有名なギボンの「ローマ衰亡史」(一七七六—八八)の出版については改めていうまでもないであろうが、いやしくも文筆をとるほどのものなら、殆どみな史書の執筆に携わつたといつても、さほど誇張の言とはいえないほどである。著名の小説家が、一人ならず、英國史を筆にしている⁴。それほど、實證的な學問が讀書と文筆の徒に重んじられたのである。たゞ、娛樂の書である小説と學問(それは大いに文學的乃至は教養的修練の傾きを帯びていたのであるが)としての歴史とは、判然と二つの分野に分れていたのである。

小説家スコットは兩様の意味で前代の影響を受けている。彼が小説の創作を始めたとき、イギリス國內では既にいわゆる産業革命が進行していた。對外問題としては、ナポレオンがまだ最後の敗北を喫する以前であつた。しかし、イギリス國民の社會生活には、まだ根本的な變化が生じていなかった。小説の主題を現在にとる限り、第十八世紀中葉の巨匠が取扱つたものと大差がなかつた。逆様の比喻を使えば、スコットは古い酒を、しかも、酸敗しかゝつた古い酒を、新しい革袋に盛る譯にかなかつたのである。彼は智的追求としての歴史に興味と信頼とを抱いた。そして、その教養的な學問を、美的鑑賞のために利用しようとした。歴史を小説に融合させようと試み、その試み(過去の生活の形象化)を見事に完成したのである。

スコットの歴史小説は、實證的であり、道徳的である。そして、そのような特徴は、作者の個性によることは勿論ながら、また、その文學的傳統の影響によることも大きいといわなければならない。

1 J. G. Lockhart: *The Life of Sir Walter Scott*, chap. XLIV.

スコットの小説

一 橋論叢 第二十五卷 第一號

- 2 S. Gwynn: *The Life of Sir Walter Scott*, chap. XVII.
- 3 Scott: *Lives of the Novelists*, "Fielding"
- 4 Tobias George Smollett (1721—71), Oliver Goldsmith (? 1730—74) など。ただし、それらの史書は今日まったく忘れられてゐる。

七

最初に述べたように、今日わが國でスコットは廣く愛讀されていない。翻譯も少く、原文で特に深く彼を鑑賞・研究する人も少い。この世界文學史上の代表的作家は、文學愛好者の内面とほとんど没交渉のように見える。しかし、スコットをたゞ今日世界文學の代表者だからという理由で、魂の共感なしに、移入しようとしても、それが徒勞に終るのであることは明かである。勿論、明治十年代に彼の移入が失敗した經過が、そのまゝ繰返されるとは限らないであろう。今日の知識人は、單純にスコットの作品の在來の文學と似通つている點に興味を覺えたり、その點のみを誇張したりなどはしないに相違ない。いや、むしろ、似通つている部分に反撥を感じるかも知れない。しかし、自分達の身につけた文物が、外國の文物の直接な理解に混り合わない譯にいかない——それを遮げない譯にいかないことは、たしかである。世界文學の代表の一人であるこの作家は、そのような抽象的な標識として、不精無精に、取上げられる限り、理解が歪められ、不徹底に終るのである。

スコットを理解するためには、先ず、讀者が彼と直面しなければならない。スコットを——更に具體的に、その一

つ一つの作品、例えば、「ラママアの花嫁」を、直接どう感得するか、どのようにこの作品と生命の交流を感じるか、というところから始めなければならない。そして、そのためには、逆にこの作品が第十九世紀の初頭にイギリスで書かれたもの、いゝかえれば、われわれとは異なる文化の傳統のうちに生れたものであることを、明瞭に知らなければならぬであろう。エドガー・レイヴンズウッドが、スコットランドの第十七世紀末葉の典型的な没落貴族であり、彼を描いた作者がその一世紀後の同國人であつた事實を、明瞭に認めることによつて、却つて、エドガーは讀者の半身となるであろう。客觀的な事實に通う心理の眞實が、率直に受け入れられるからである。

そのように、知られ、味われたとき、スコットは完全に理解されるであろう。そして、讀者自身の精神態度の反省に資するであろう。